

復刻

# 映画新報

映画新報社 第1号～第25号（1950年8月1日発行～1952年3月15日発行）

発行編集：田中三郎



★ 総合監修：谷川建司 発売元：文生書院

第四回配本  
(全2冊)

1～10号

1950年8月1日～1951年3月1日

計574頁

¥42,350 (¥38,500 税別)

11～25号

1951年4月1日～1952年3月15日

計518頁

ISBN978-4-89253-640-9

文生書院

〒113-0033 東京都文京区本郷6-14-7

電話 03-3811-1683 Fax 03-3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp

# 『映画新報』 解説

たにかわたけし

谷川建司 (早稲田大学)

戦時中の雑誌統制で自ら『キネマ旬報』の看板を下ろし、日本映画雑誌協会理事長、日本映画協会参与など体制側に寄り添ってきた同誌の創始者・田中三郎は、私生活では家族の事業失敗から借金地獄に陥るなど「霧消したもろもろの映画出版物の怨霊が祟つたらしく、私ごとでいうと、それからは儼なことがなかつた」という。戦後に飯田心美、水町青磁、友田純一郎、滋野辰彦、村上忠久の五名が『キネマ旬報』再建の相談を持ち掛けた時も自ら陣頭指揮を執る気力はなく、誌名を彼らに譲り、「同志の奮闘を傍観するにすぎない有様であつた」と『映画新報』の「創刊の辞」で述べている。

だが、その再建『キネマ旬報』が4年間の奮闘虚しく昭和25年(1950年)4月1日発行の第七九号をもって休刊となり、かつ戦時中の廃刊に涙を流して反対し、再建号の中心人物として健筆を振るった水町青磁が第79号の発売直前に新橋駅で事故死した報に接するに及び、何かに突き動かされるが如く田中が編集兼発行人として映画ジャーナリズムの世界に現場復帰した雑誌、それが昭和25年8月1日に創刊号が発行された『映画新報』(英語名: SCREEN HERALD)である。その背景に、水町の死を無駄にしないためにも何とか再び『キネマ旬報』を復活させよう、との想いがあったことは創刊号での2頁の水町追悼特集からも容易に推察できる。

だが、熱い思いとは裏腹に、現実は厳しいものだった。まず、自らが生みの親であった『キネマ旬報』という誌名は、休刊中とはいえ、自分が再び使うことは出来なかった。何故なら、再建号休刊は単なる経営破綻でxxはなく二つの組合間での発行権を巡る内紛があったが故であり、いずれはどちらかが再発行する事が予想されたからである。「創刊の辞」で田中は次のように語っている。「ここに、「映画新報」を創刊するについては、あらゆる私情、障碍を排しても、本来ふたたびみたび「キネマ旬報」を呼称すべきでもあるが、そこにはそれを<sup>はば</sup>阻む多くの現実の問題がある。殊に嘗て自らの手でこれを閉じた門でもあり、国家社会事情の変遷、日本映画界状勢の推移からも、徒らに十年以前の古きになずむの安易などは或いは大きな過誤を犯すの因となるべきをも惧れるのである」

映画ジャーナリズム界では一目置かれる田中の現場復帰だったにも拘らず『映画新報』の経営は不調だった。

その最大の理由は、何と云っても『映画新報』創刊の僅か2か月後の昭和25年10月15日に、大橋重房が権利を買収して復刊成った『NEW キネマ旬報』が清水千代太を編集兼発行人として登場したことである。—『映画新報』は戦前の『キネマ旬報』と同じく表紙部分は青一色の印刷で、昭和25年11月1日発行の秋季特別号(第6号)や、昭和26年(1951年)1月1日発行の新年特大号(第9号)で何とか表紙まわりを三色にするのが精一杯だったのに対して、復刊された『キネマ旬報』(「NEW」が付けられていたのは復刊第9号まで)の方は最初の復刊特別号がいきなりカラー(四色)の表紙、その後も通常の号でも毎回表紙は三色と見栄えが良く、資本力の差を感じさせた。

また広告出稿を見ても知名度のある『キネマ旬報』にはセントラル・モーショ  
ン・ピクチャ・エクスチェンジ解体後の各メジャー映画会社など数多くの映画



『カルメン故郷へ帰る』広告第6号(上)と第7号(下)の表4掲載

会社が華やかに誌面を飾ったのに対して、『映画新報』は広告獲得数も少なく、日本最初の総天然色映画の『カルメン故郷に帰る』の広告ですらフルカラーでは掲載できないなど、媒体としての力の差は歴然たるものだった。

だが、編集面では『映画新報』は他誌にはない独特の個性があった。『キネマ旬報』のほうが再建号、復刊号ともに同人制を採っていたのに対して、『映画新報』は田中の持つ人脈をフルに活かして、毎号、様々な論客が入れ替わり立ち代わりそれぞれの得意分野で健筆を振るった。ざっと名前を挙げると、岩崎昶、井澤淳、清水晶、北川冬彦、植草甚一、土方敬太、瀧澤一、大黒東洋士、滋野辰彦、南博、時実象平、藤本眞澄、八住利雄、岡本太郎、今村太平、南部圭之助、新藤兼人、岩佐氏壽、沢村勉、瓜生忠夫、飯田心美といった面々が並ぶ。植草、滋野は復刊『キネマ旬報』の同人でもあった訳だから、必ずしも映画論壇が『映画新報』派と『キネマ旬報』派とに二分されたというようなことではなかった。

創刊号での田中による「創刊の辞」のあと、第2号からは社説に当たる「時言」欄を、今井正、牧野満男、植草圭之助、三浦信夫（大映プロデューサー）、土井逸雄（大映プロデューサー）、阿部義和（興連中央委員長）、金指英一（教育映画配給社社長）、そして五所平之助と、これまた毎号様々な立場の者が担当した。例えば、牧野は映画界の再編成への提言を、五所は映画ライブラリー創設の必要性を述べるなど、様々な立場の映画人が集うサロンの役割を目指していたことが判る。「時言」欄は第九号で終り、第17号からは「焦点」として、無記名だがおそらくは田中自身が執筆したが、それも5回で終わっている。

ほぼ毎号10頁ほどを割いていた特集頁のほうは、松竹特集、東宝特集、競作となった『自由学校』特集のようなものはどこの雑誌でも組むだろうが、当時政府が戦時中の映画法に代わるものとして成立を目論んでいた「映画文化法」に関して、第14号、第15号と続けて取り上げてその問題点を論じているのは重要だし、「教育映画界特集」（第16号）、「映画機械界の現状」（第20号）、藤山愛一郎の寄稿を求めた「映画産業とPR」（第22号）、「独立プロ特集」（第24号）の様な派手さはないが堅実な特集が目立つ。

広告出稿も映画機材の会社や教育映画の会社など業界を下支えしている会社が目立つが、「第一線作家群の横顔」というグラビア連載では、毎回、新星映画社、藤本プロ、第一協団（河津清三郎の独立プロ）、近代映画協会、映画芸術協会（山本嘉次郎や黒澤明が立ち上げた組織）、芸研プロ（熊谷久虎と原節子の独立プロ）、綜芸プロ（嵐寛寿郎や、若き日の三船敏郎が在籍した独立プロ）といった独立プロを取り上げて、大手映画会社に対するのと同じくらいの熱量で応援し、エールを送っていたのも大きな特徴だった。

『映画新報』は、当初は毎月1日と15日の月2回発行（特別号の場合は月1回）で発行されていたが、前述の新年特大号（第9号）を出した後は3月1日、4月1日の発行、その後7月1日までは月2回発行しているが、それからは月に一回程度の不規則な発行ペースとなり、昭和27年（1952年）3月15日発行の第25号で力尽きた。そして、田中三郎はその後二度と映画雑誌には関わることなく生涯を終えている。



「第一線作家群の横顔」(1)(2)  
第1、2号掲載。以下、第8号まで7回連載（第6号休載）

註：創刊号と違って、終刊号は発行時点でそれが終刊号となることが決まっていなかった場合がほとんどであるため、いつ終刊となったか確定させることは難しい。本雑誌の場合、執筆陣の一人であった時実象平氏の証言により25号を終刊号と断定した。

# 【復刻版】 占領期 を中心とした 『キネマ旬報』 後継誌

## 既刊 『キネマ旬報 再建号』 (キネマ旬報社)

第1号～第79号(1946年3月1日発行～1950年4月1日発行)まで  
キネマ旬報社内の集合離散のため、戦後刊行の『キネマ旬報』の号数にカウントされていない幻の号。

第1回配本 (全3冊)	1～10号	1946年3月1日～1947年2月10日	計476頁	¥51,150(¥46,500 税別) ISBN978-4-89253-626-7
	11～24号	1947年3月1日～1947年12月1日	計538頁	
	25～36号	1948年1月1日～1948年6月15日	計536頁	
第2回配本 (全4冊)	37～48号	1948年7月1日～1948年12月15日	計624頁	¥76,450(¥69,500 税別) ISBN978-4-89253-627-4
	49～60号	1949年1月1日～1949年6月15日	計562頁	
	61～72号	1949年7月1日～1949年12月15日	計618頁	
	73～79号	1950年1月1日～1950年4月1日	計520頁	

## 『アメリカ映画』 (アメリカ映画研究所/編集=「キネマ旬報」同人)

第1号～第21号(1946年11月1日発行～1948年10月発行)まで  
アメリカ占領政策に沿って発行された。

第3回配本 (全2冊)	1～11号	1946年11月1日～1948年1月20日	計459頁	¥35,200(¥32,000 税別) ISBN978-4-89253-653-9
	11～21号	1948年2月20日～1948年11月20日(終刊)	計440頁	

## 『映画春秋』 (映画春秋社/編集=「キネマ旬報」同人)

第1号～第34号(1946年8月1日発行～1950年4月10日発行)まで  
キネマ旬報から派生した映画論壇誌。映画言説資料としての重要な雑誌。

第5回配本 (全3冊)	1～5号	1946年8月15日～1947年3月15日	計430頁	¥46,200(¥42,000 税別) ISBN 978-4-89253-646-5
	6～11号	1947年4月15日～1948年2月10日	計490頁	
	12～18号	1948年3月10日～1948年9月10日	計476頁	
第6回配本 (全3冊)	19～25号	1948年10月10日～1949年7月10日	計548頁	¥51,150(¥46,500 税別) ISBN978-4-89253-647-2
	26～30号	1949年7月10日～1949年12月10日	計512頁	
	31～34号	1950年1月10日～1950年4月10日	計476頁	

★原本の状態等で、価格が変更になる可能性があります。